

耳聾について

吉岡 広記

日本鍼灸研究会

【緒言】

「耳聾」は、『説文』耳部に「聾、無聞也」とあるように、耳が聞こえない様を言う。医書では、『靈枢』刺節真邪に「夫癢者、耳無所聞、目無所見」とあるように、「癢者」、「耳無所聞」とも記される。古くは馬王堆出土の『足臂十一脈灸経』(以下『足臂』と略す)では足少太陽脈と手少陽脈の病として、また同所出土の『陰陽十一脈灸経』(以下『陰陽』と略す)並びに張家山出土の『脈書』では足太陽脈(鉅陽脈)、『靈枢』経脈は手太陽脈の所生病、と手少陽脈(耳脈)の是動病所生病として、それぞれ考えられていた。すでに戦国末頃には一定しない「聾」の認識は、後漢代にはさらに様々な見解が打ち出され、複雑な様相を呈す。『素問』、『靈枢』、『明堂』(『甲乙経』)の記述から変遷を追った。

【『素問』、『靈枢』(運氣七篇は除外)】

『素問』は五蔵生成(以下 S10 と略す)、『素問』第十篇を示す。諸篇もこれに倣う、**生氣通天論(S3)**、診要終論(S17)、蔵気法時論(S22)、通評虚実論(S28)、熱論(S31)、刺熱(S32)、厥論(S45)、脈解(S49)、刺禁論(S52)、繆刺論(S63)の 10 篇、『靈枢』は終始(L9)、経脈(L10)、寒熱病(L21)、熱病(L23)、厥病(L24)、雑病(L26)、決気(L30)、刺節真邪(L75)の 8 篇に見える。病に深さ(所在)という観点が加わり、経脈だけでなく五蔵の病として設定される。経脈は、足少陰(S32、L23)、足厥陰(S10)、足陽明(L26)、足少陽(S10、S17、S31、S45、L26)、足太陽(S49)、手陽明(S63:絡、L10:別)、手太陽(S45、L10)、手少陽(L10、L21)の 8 脈と増え、陰陽では陽脈が、手足では足が多く、足少陽脈が最多である。五蔵は肝(S10、S22)、肺(S22)、腎(S32:骨、L23:髓、L30:精)の 3 蔵であるが、その中には経脈から五蔵へと病が進行する場合も含まれる(S10「過在足少陽厥陰、甚則入肝」)。なお、後に隋末の『諸病源候論』で腎の病として認識されるための規定が初出するが、ここではいまだ主要な認識ではない。病因は、すべてに示されるわけではないが、傷寒による熱病(S31、S32、L23)、厥病(S3、S22、S28、S45、L24)、精脱(L30)、刺鍼の過誤(S52)の 4 つに分けられる。治療部位は、経脈のほかに、耳の周辺部(L24:耳中、S63:耳前、S52:客主人、L21:天牖、L75:聴宮)と手の特定の部位(S63:手陽明之絡の病 - 手大指次指爪甲上去端如韭葉・中指爪甲上与肉交者、L24:手小指次指爪甲上与肉交者)が挙げられる。

【『明堂』(孔穴主治条文のみを対象とし『素問』、『靈枢』との対応箇所は除外)】

『甲乙経』巻七・六経受病癢傷寒熱病第一中(天牖)、第一下(6条6穴。少沢。陽谷。後谿。竅陰。俠谿。束骨)、巻十一・陽厥大驚癢狂癩第二(1条2穴。膈俞。偏歴)、巻十二・手太陽少陽脈動癢耳病第五(14条20穴。上関。下関。陽経。関衝。液門。陽谷。耳門。聴会。聴宮。翳風。会宗。天窓。天容。肩貞。腕骨。商陽。合谷。中渚。外関。四瀉)の 4 篇に見え、孔穴主治条文は 22 条、穴は凡そ 29 穴(陽谷の重複を含む)である。病の深さや病因は、主治条文には示されないが、篇名や前後の主治證からある程度推定できる。病の深さについては、五蔵という観点は無い。なお、巻十二・第五は、『靈枢』経脈の影響を受けての篇名である。治療部位には、穴という観点が明確に加わる。部位別に分けると手 15 穴(手陽明 4 穴、手少陽 6 穴、手太陽 5 穴)、足 3 穴(足少陽 2 穴、足太陽 1 穴)、耳前 6 穴(足陽明 1 穴、手少陽 4 穴、不明 1 穴)、頸 3 穴(手少陽 2 穴、手太陽 1 穴)、肩 1 穴(手太陽)、背 1 穴(不明)と手が最も多い。なお、患部に近い耳前・頸・肩が合わせて 11 穴であるのに対し、経脈と関わり深い手足が 18 穴と多く、経脈への意識が高いことがうかがわれる。各部の経脈分布は、陰陽では陽脈のみであり、手足では手が多く、『陰陽』や『脈書』で耳脈と称された手少陽脈が最多であり、『素問』、『靈枢』とは傾向が異なる。

【結論】

後漢代の認識は、『足臂』などにはじまる経脈の病という観点の敷衍であった。